

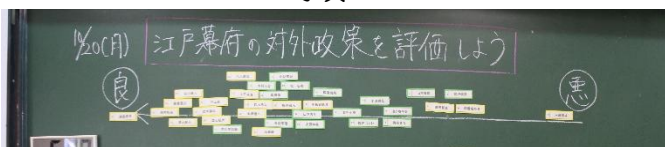
1. 授業を構想するにあたって

本実践は、単元課題「江戸幕府はなぜ265年も続いたのだろうか」に対して、幕府の对外政策を扱う1時間の授業として構成したものである。本校では、歴史学習におけるエンパシー育成の手立てとして「単元構想」「情報」「発問」の三点を位置付けているが、本授業ではとりわけ「情報」の提示によって、当時の人々の思いや置かれた状況に迫らせることをねらいとした。特に、幕府の鎖国政策の一環として行われたキリスト教禁制と取り締まりに焦点をあて、キリシタン弾圧に関わる具体的な資料を「情報」として提示することが、生徒のエンパシーをどのように働かせるのかを検討した。

2. 本時に授業について

授業前半では、キリスト教の禁教政策、長崎貿易、禁教の強化（弾圧）、朝鮮通信使や薩摩を通じた琉球との関係など、幕府が展開した複数の对外政策について、歴史的背景とともに整理を行った。そのうえで、生徒自身にこれらの政策を総合的に判断させ、一本の数直線上に「よい政策」から「悪い政策」までの幅を設定し、自分の立場を示す活動を行った。（写真1）

写真1

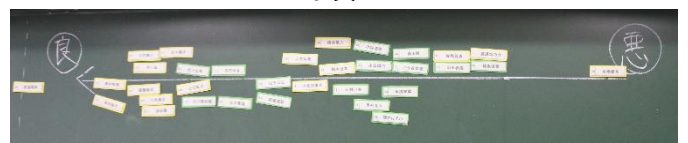


その後、授業後半において、キリシタン信徒弾圧事件（原主水）、イギリス国王使節が安倍川で目撃した処刑後の様子、江戸や長崎におけるキリシタン弾圧の実態など、当時の状況が具体的に読み取れる資料を提示した。（資料1）これらは、幕府が示した禁教方針の意図とともに、弾圧された側の痛ましい状況をも生々しく伝える資料である。こうした「情報」をもとに、再度、生徒に幕府の对外政策を評価させることで、資料提示前後での思考の変容から、生徒がどの程度エンパシーを働かせながら歴史的事象をとらえようとしたのかを検証する授業とした。

3. 生徒のあらわれ

資料提示前後での生徒の評価には幅が見られた。資料提示後、对外政策を「以前より悪い」と判断する生徒もいれば、逆に「よりよい」と評価するようになった生徒もいた。また、判断そのものは大きくは変わらないものの、考えの根拠が深まる生徒も確認された。すなわち、数直線上の位置は同じでも、思考の中身に変容がみられる生徒が一定数存在した。（写真2）

写真2



加えて、資料を読んだ生徒の感想は多様であった。「ここまでひどい弾圧が行われていたとは思わなかった」という驚きだけでなく、「幕府としては絶対にキリスト教を広めさせない強い意志を感じたため、政策としてより肯定的に評価した」と述べる生徒もいた。また、「禁教政策としては理解できるが、具体的な被害者の実態を知ると、本当によい政策だったのか迷いが生じた」と葛藤を語る生徒や、「江戸幕府が長期にわたり政治を安定させたという観点で考えると、よい政策であったと思う」と、単元課題と結びつけて再評価する生徒もいた。（資料2）

これらの反応から、生徒は単なる「禁教政策の結果、キリシタンが弾圧された」という事実を知識として整理しただけでなく、弾圧される側、弾圧する側双方の立場や思いを想像する姿勢を見せていたことがうかがえる。資料を読み取る中で、当時の幕府の意図やキリシタンの抱えた苦悩に目を向け、どちらか一方の立場に固定されず、多面的に歴史的事象を理解しようとする姿が確認できた。

4. 成果と課題

本実践は、「情報」の提示を通して、幕府の对外政策の評価を否定的な評価へと転換させることを目的としたものではなく、各政策に込められた幕府の思惑や治安維持への意図とともに（サティスファイドの視点）、その政策によって被害を受けた人々の苦し

みや葛藤（ディサティスファイドの視点）にも同時に目を向けながら、政策全体を複眼的に理解することをねらいとした。今回、生徒の多くが資料を通して弾圧される側の思いに触れ、自分の考えを深めていったこと、また逆に弾圧の実態を知ったうえで幕府の意図をより強く読み取り、肯定的評価に至った生徒がいたことは、両者の立場にエンパシーを働かせようとする姿の表れであり、本実践の成果といえる。

特筆すべきは、提示した史料が主に被害を受けた側（ディサティスファイド）に関わるものであったにも関わらず、そこから幕府側（サティスファイド）の意図を読み取るなど、一つの情報から他者の多面的な立場へ思考を広げた生徒が存在したことである。これは、単なる情緒的反応ではなく、歴史的事象に潜む利害や構造を理解しようとする高次のエンパシーの萌芽ととらえられるのではないだろうか。

一方で、課題も明確となった。本授業では、エンパシーを促す手立てとして、授業後半に「後出し」の形で情報を提示したため、教師の意図に沿った思考の流れが生徒に生じやすく、結果としてやや誘導的な学習構造となってしまう側面がある。また、強烈な内容の資料を後半に提示したことで、生徒の思考が情動的反応に影響される可能性も否定できない。情報の提示方法および提示のタイミングについては、より慎重に設計する必要がある。

さらに、今回のような1時間の授業における実践だけでは、単元全体を通して継続的にエンパシーを働かせる学習構造が十分に確立されていたとは言い難い。今後は、単元の流れ全体の中に、政策の背景、幕府の不安、世界情勢、キリシタンの信仰、地域ごとの対応の違いなど、多層的な視点を計画的に組み込み、生徒が継続して複眼的に歴史的事象に向き合える仕組みを構築することが課題である。

5. 参考文献

原田智仁(2016).「歴史的エンパシーに着目した参加型学習を」『社会科教育』686(6). pp. 36-39.

(財)静岡観光コンベンション協会.” 大御所四百年記念 家康公を学ぶ”. <https://www.visit-shizuoka.com/t/oogoshoh400/index.htm>, (参照 2025-

09-02).

文部科学省(2017). 中学校学習指導要領解説 社会編. 東洋館出版社.

国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2020). 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校社会】. 東洋館出版社.

資料 I

【補足資料～禁教の影響～】

帰国できなくなった日本人

日本こいしや こいしや かりそめにたちいでて
又とかえらぬふるさとおもへば 心もころな
ず なみだにむせびめもくれ ゆめうつと候ど
も あまりのことに ちゃつつみ一つ しんじま
いらせ候 あらにほんこいしや こいしや こい
しや うばさままいる こしよろ

有馬の領主(島原藩主)は収入を増やすためにふつうの税に加えて、他の重税を課していた。支払うことができない百姓は虐殺された。ある百姓の娘が連れて行かれ、裸にされて燃えさかる薪で全身を焼かれた。父親は、借金を支払うまで、娘を人質にとられるだけと思っていたが、娘が犠牲になったと聞いて、怒り狂い、仲間と相談して、代官とその家来をおそった。
(「日本切支丹宗門史」)



① 懐結めにされるキリシタン
(「吉利支丹退治物語」) 島原藩主は、信仰を捨てない者を残酷な方法で処刑しました。

【キリスト教の広まり】

慶長年間(1596～1615)、駿府はキリシタン信仰が早くから広まった地で、江戸より先に教会が建てられていた。1607年には宣教師パジェスが家康に布教を願い出ており、すでに多くの信者が存在した。1611年、スペイン使節ビスカイノ来訪時には信者や大奥の侍女ジュリアらがミサに参加し、信仰がまだ自由だった時期の駿府の様子が記録されている。

【他国から見た弾圧】

イギリス国王使節セーリスは、安倍川近くで磔や斬首にされた多くの信者の死体や十字架を目撃し、その残虐さに衝撃を受けている。信者は火刑や拷問にかけられ、埋葬も許されず、墓から掘り出されて海に捨てられることもあったという。

【江戸での弾圧】

徳川将軍家は権威を示すため、仏滅の1623年10月13日、高輪の札の辻で見せしめの処刑を行った。江戸参府の大名や群衆が見守る中、女性や子どもを含む多くのキリシタンが斬首された。以後も高輪などで約100名、江戸全体で2000名近くが殉教したと伝わる。

【駿府での弾圧】

慶長18年(1613)、家康は「伴天連追放令」を出し、駿府からキリシタン禁教が始まった。発端は岡本大八の朱印状偽造事件で、彼は拷問にかけられ多くの信者名を白状し、駿府で火刑にされた。その後、家康の鉄砲隊長・原主水ら信者50人が元和9年(1623)江戸で斬首・火刑に処され、諸大名の前で見せしめにされた。(額に十字の烙印を押し、さらに手足の指全てを切断、足の筋を切るという罰がくだされた。駿府は禁教と迫害の出発点となった。)

【長崎での弾圧】

江戸幕府の禁教下、長崎の「郡崩れ」では608人が捕縛され、411人が斬首された。牢死や拷問死を含めれば489人にのぼる。処刑は万治元年(1658)に一斉に行われ、大村では男女131人が列をなして首をはねられた。子どもや妊婦も拘留され、過酷な牢内で多数が命を落とした。幕府は「八割を斬罪」とする方針を示し、長崎奉行はこれに従って厳罰を実行した。処刑後はキリシタン墓を暴き遺物を破棄し、伊勢神宮の神札配布などで信仰の転換が強制された。

大日本帝国憲法(1889年発布)

「臣民ハ法律ノ範囲内ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」意味：法律の範囲内で信教の自由が保障される
「法律の範囲内」とあるため、政府の方針に反する宗教活動や公序良俗に反する行為は制限され得た。

日本国憲法(1946年公布)

第二十条 信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。

2 何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。

3 国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

【資料2】資料提示後に考えが変わった／変わらなかった理由（原文ママ）

考えが「変わった」

- ・ がらっと考え方見方が変わった。キリシタンが酷いことをされているのも分かった。ただ、キリシタンが弾圧されているのはとても残虐なことだとは思うけど、政府の指示に従わなかったのは事実なのではないのかなとも思った。補足資料にはすごく残酷な処刑方法が書かれているが、そこまでしなければキリシタンが減らなかったという事実でもある。国を安定的に保つためにも、政府の指示に従わなかったら救いようがない。
- ・ 資料を見て新たな視点や思いを持つ事ができ、それらを踏まえて再度考える事でより深まった考えが出来たと思います。
- ・ 正直見る前までは幕府がキリスト教徒を減らすために頑張っているというイメージでしたが、この資料を見てからは実際にキリシタンがとてもひどい扱いを受けているという印象が強くなり、幕府のやったことは間違っているという考えに変わりました。
- ・ 資料をみて、自分が予想していたキリシタンへの対応を遥かに超えてびっくりした。しかもこの考え方が大日本国憲法の時まで続いていたことには目を疑った。また世界から見ても残虐すぎると思われていたために、対外政策の評価を少し下げた。
- ・ 最初は鎖国してすごくよかったなと思っていたけれど、鎖国のせいで家（日本）に帰れなくなった人や娘を残酷に殺された人もいると知ってあまり良くないなと思いました。
- ・ 振り返ってみると幕府側の立場でしか考えていおらず、視野が狭かったなと反省しています。先生が補足資料を作ってくださったおかげで気づくことができました。ありがとうございます。これからどの授業でも視野を広くしていきたいです。はじめは海外に行ってしまった日本人がいるということを知らなかったのも、その人たちのことを考えておらず、結構いい政策なのではないかと思いましたが、日本人も日本に帰ってきてはいけないということを知ったのでその人たちのことを考えたら母国に帰れないことは辛いなと思った。
- ・ 詳しい資料があることで当時の日本がイメージしやすかったり気持ちがよりわかりやすく読み取れたりした。資料を見て、キリスト教に対する刑罰が思ったより重いなと思った。
- ・ 『江戸時代』だけでなく、他の年代の資料も載っていたことによって禁教していた時代からの流れが見ることができて。宗教の自由が昔はなかったこと、今は宗教が違ってもいいじゃないか、強制しなくてもいいじゃないか、ということが感じられました。そして、禁教されていた時代のキリシタンの扱いを見て、今と昔こんなに違うのかと驚きました。埋葬も許されないとなるとより親族はとても辛いと思います。
- ・ 幕府がキリスト教を恐れていて、手段を選ばないくらい棄教にこだわっていたことがわかった。殺しまくったせいで、一揆につながってしまったから、「悪」に少し近づいた
- ・ 今まで、鎖国をしたことも江戸幕府が265年間続いた1つの要因だと考えていたけれど、この資料を見て、逆に悪影響だった可能性もあったのではないかという考えに変わりました。多くの人がキリスト教を信仰してただけなのに殺されてしまう、少し理不尽な部分もあったんだなと思いました。もっといろいろな立場から、鎖国がもたらした影響について考えていくべきだなと感じました。
- ・ 最初は百姓がキリスト教を禁止したことに不満を持って島原・天草一揆を起こしたと考えていました。けれど、幕府の人たちに殺されたりしていることを知って殺されてしまった家族が幕府と戦おうと決めて仇を討つ可能性もあったのかなと思いました。
- ・ 想像していたよりもなんか罰がすごくて、資料を見る前は取り締られたのかーみたいな感じだったけど、見た後はキリシタンに対して同情心が生まれた。
- ・ 意外とキリスト教に対して厳しく感じた。キリスト教を信仰していても見逃してやるケースもあるのかなーと思っていたが、見つけたら即刻殺す、子供でも。という場合もあると知り、怖いと感じた

- ・外交では、キリスト教、キリスト教徒についてやった。資料の中ではキリスト教徒が厳しく処刑させられてしまっていたり踏み絵させたりしていた。キリスト教を追い出す動きが見れた。実際、その動きをしなかったら天草一揆がより大規模になっていただろう。ところで、キリスト教に焦点を当てられていたがキリスト教を信仰していないもの達は普通に暮らせていたので、「日本」を守れたのではないかと。資料を見た後はもう少しキリスト教の力を弱める政策をとれたのではないかと思った。
- ・始めは、江戸幕府視点で考えていてすごく大きな事件とかもなかったし落ち着いていて良かったのかなって思って、仏教を推すのも一つにまとめた方が良かったのかなって軽く思っていたけれど、あとから実際にキリシタンが処刑された方法とか、年貢を納めなかった人が受けた処罰をして、自分はその人たちから年貢を受け取って生活しているのになんでそんなことするのかって、自分が将軍とか領主だとしてももっと全ての人の気持ちを考えるべきだったんじゃないかなと思った。
- ・考えは少しだけ変わったが、それは「少しだけ」で、大きな変化はなかった。幕府は自分たちの国を守るためにやったことであって、100%幕府が悪いわけではない。キリスト教が禁止された時点で改宗しなかった人々も悪いと思う。しかし、幕府の弾圧はかなり強引かつ残酷だったので、ほかにも方法はあったのではないかと思う。
- ・資料を見て、最初は幕府とかのことを考えてばっかいたけど、資料を見てキリスト教信者側の人たちだったり、もっといろんな視点を使っていきたいと思った。
- ・私は考え方が変わりました。実際のところ、自分の立場から考えていたけれど、そういう百姓などの気持ちなどは考えていなかったなと思った。あの資料によってもっと、その立場や、身分の差を考えていかなければいけないと感じた。満足する人、不満がある人、これを現代の社会と繋げていってもいいと思った。
- ・キリスト教の禁止についてはいいと思ったけれど、資料を見てキリスト教徒への罰則が厳しすぎたから国民からの批判は大きかったと思うし、こんなに厳しくなくても良かったのではないかと考えが最初より良くない方に寄って、変わった。
- ・資料を見て少し考えが変わった。今まで日本政府の視点で対外政策を評価していたので、キリスト教をなくすというのはとてもいい考えだと思っていたが、キリシタンの立場にたったときに少しやりすぎなのではないかという思いも出てきた。2つの立場から見ることにより考えが深まったと思う。この視点は補足資料がなかったら出てこなかった視点だと思った。また、今後の授業もたくさんの視点を持ちたいと思った。
- ・変わった。キリスト教が日本で広まったことにより、多くの人が幕府の長続きのために死んでいったと思うと、もっと違う案はなかったのかと思いました。逆に、このような政策をとったことにより、幕府に不満を持つ人が増え、争いが起こらないのかと思いました。
- ・変わった。もともと政策に対して、徹底しているとは思っていたが、ここまで徹底してとは思わなかった。徳川將軍家は徹底して、国を守ろうとしていると思った。結構残酷なことをしているがこういう犠牲があって265年も続いたと思った。將軍にも考え方があって、その時の人は大変だったと思うし不自由度とも思った。
- ・知らなかった資料が出てきたので、考え方は変わった。また、特にイギリス目線で書いて合った資料とかがあるので、外国目線からの考え方もできたので良かった。
- ・補足資料を見る前は江戸幕府の貿易などの良いところしか考えていなかったが、補足資料を見て、幕府や日本にいる農民以外にも海外に行っていて鎖国で日本に帰れなくなってしまった人や斬首や火刑などによって処されていく人たちの気持ちなど色々な人の気持ちを考えることが大切だということに気づき、考えが変わりました。
- ・私は、補足資料を見て意見が変わりました。キリスト教を布教してはいけないというだけではなく、キリシタンが1人の残さず、全員殺されてしまったからです。江戸幕府が長続きした理由として、幕府がとても反乱を怖がっていてとても慎重で、細かい規則がたくさんありました。確かに、幕府を長続きさせるためには

キリシタンを全員殺してしまうという方法が1番安全だと思いますが、私は反対です。

- ・幕府側の視点ではキリスト教の勢力を徹底的に抑えることができてよかったと思うけど、その政策を受けるキリスト教徒側の視点では不満に思っている人もいたと考えが変わりました。

考えが「変わらなかった」

- ・キリスト教の増加や幕府を長続きさせるためなら仕方ないことだと思った。
- ・ゆるーく取り締まるんじゃなくてしっかりと取り締まっているからその時の時代においてはそうするしかなかった？それがいちばんの最善策だったと思う。
- ・正直に言って、評価は変わらなかった。ただし人間の道徳心がある限り、幕府のやっていることがちょっとリスクで、残酷だなと思いました。幕府の続いた理由もこれにあるけどなんか嫌だなと思いました
- ・私はそのようなことが起こっていることを知っていたので考えは変わらなかった。あそこまでやっても、キリスト教をやる人はやる。あそこまで残虐にしくなくても良いのではないかな？
- ・少し変わった。かわいそうだからと言うよりも無駄に苦しめていることが幕府として良くないと思ったから。悪い方へ少し変わった。
- ・自分の予想通りにキリスト教の人は結構苦しんでいたのだから考えは変わらなかったが、さらにキリスト教徒について詳しく知れる機会となった。
- ・帰らないキリシタンをたくさん殺していたり、帰れない日本人が悲しんでいたりはちゃんと明確にわかっていたわけではなかった。でも、それを踏まえても幕府のやったことは圧倒的にメリットの方が大きいと感じてしまったので意見は変わらなかった。
- ・虐殺はいけないうえにキリスト教禁止する判断自体は間違っていないと思うからあまり変わらなかった 禁教令により、ひどいことをされているキリスト教徒や、鎖国で帰れなくなった人たちがいましたが、亡くなってしまったり、帰れなくなってしまった以上、幕府に対して一揆を起こすことはできないので、「幕府が長続きするために有効だったか」という視点で考えると幕府が長続きしなかった直接的な理由にはならなかったかなと思ったので考えは変わりませんでした。
- ・キリスト教徒をたくさん虐殺していて残酷だなと思った。だからもっと処罰は緩くしてもいいなと思った。けどそれ以上に幕府を守れた方が大事だったから、考えは変わらなかった
- ・キリスト教と幕府の関係についてより深く知ることができました。また、さまざまひどい扱いがされていたのだなと感じました。ただし、課題である「なぜ江戸幕府は265年も続いたのだろう」に対しての考えは、あくまで幕府目線なので、特に変化はありませんでした。
- ・資料を見る前から、対外政策による百姓や農民などの視点から見た印象の悪さや苦しみの方が大きいと考え、「悪い」寄りだったので、考えとしては、変わりませんでした。そのような思いが強まりました。また、思っていたよりも制作の内容が厳しく、苦しかったということを感じました。日本の対外政策によって発展が他国に比べ遅れていたの、もう少し良い手立て・制作などはなかったのかと思ったり、そこについてみんなで考えていきたいと思いました。
- ・幕府の目的は、日本からキリシタンを消して考え方を統一するのが目的だから、キリスト教の考えから仏教の考えにしたり。海外送りにしたりすればいいのではないかなと思った。死刑やそれ以上の刑などそこまでする必要はない。
- ・資料を見てより対策への理解が深くなったなと思って、あの資料を見た上で確かに残酷かもしれないが、その行為を含めても考えは変わりませんでした。
- ・幕府の外交の評価が上がった。具体的には、人間は、実際に誰かが罰せられないと行動しない生き物だから、見せしめはとても効果的で、それを考えた幕府は頭がいいなと思った。
- ・変わらなかった 補足資料にかいてあることは、知っていたので、そのことまで考えていたので、全く変わ

りませんでした。キリスト教の取り締まりが厳しくキリシタンたちに恐怖を与えていたという点から見ると、キリスト教禁止への本気度が見えてより強い対外対策だったのではないかと思います。

- ・ 結局、キリスト教を廃止しなければいけないという考えは変わらなかった。多少の犠牲を考えた上で、メリットと、デメリット考えていたため、あまり、考えに変化がありませんでした。大げさに考えることでも、意見が変わらなかったら、もう変わらないと思いました。
- ・ 資料を見て、厳しい罰を受けていたと改めてわかったが、厳しくしないとキリスト教を信仰する人々は減らないし、結果的にはいい方向に進んだと思うので(ペリー来航時までは)、考えはあまり変わらなかった！(良いにかなり近い考え)
- ・ 幕府の外交の関する補足資料を見て、幕府の政策が良かったか悪かったかの考えはあまり変わらなかった。でも、こんなに殺されているとは思わなかったし、もっとキリスト教のリーダーだけ、処刑して、あとの人は牢獄とかはできなかったのかなと思った。
- ・ キリスト教を禁止したり、制限を細かくかけたりしている裏では人々が大量に殺されていることを知りました。しかし、何かをする(今回の場合だったら禁教など)には何かの犠牲が必ず生まれてきます。だからそれはしょうがないことなのかなと思い考えは変わりませんでした。
- ・ 補足資料の内容がキリスト教徒の罰則についてで、もう既に考えていたことが書かれていたので、あまり考えが変わらなかった。(少しは残酷だなーと感じた。)
- ・ 変わらなかったような少し良いの方に傾いたような感じてした。理由は、キリスト教を廃止する政策をやっていたことは分かっていたましたが、詳しい罰については、何も知りませんでした。あんな残酷なことをやっているんだなあーぐらいしか思わず、キリスト教を禁止したのにやっている人が悪いし、もしもっと罰が軽かったら、キリスト教信者の勢力衰退にはつながらない。あそこで、しっかり処刑することで、キリシタン増加を防ぐことができるし、仏教信者に戻すことができると思いました。
- ・ 最終的に考えは変わらなかったけど、最初の考えよりより重みというものができた考えになったと思う。
- ・ ほとんど変わらなかった。厳しいのはそうだと思うけど、幕府とか国としてみたときにしょうがなかったり抑止力になっていい政策っていうのもあったから自分は授業の良←→悪でいう 75 から 80%位かなと思う。ただ、反乱とか怖いもの、改善しなければいけないところもあるっちゃあるからこのくらいかなと思う。
- ・ 変わらなかった。人として悲しいことだし、今あったら嫌だなと思ったけれど、幕府の政治を評価するという視点ではそういうことをしないと難しかったんだな。今の日本の仕組みの方が政治的には不安定かもしれないなと思った。
- ・ 幕府側から見れば、大勢の方もキリシタンが集まるということが脅威になるため虐殺することは長期的に見て長く続くために必要だったと思うので変わらなかった。
- ・ あまり変わらなかった。可哀想だとは思いますが幕府目線としては支配を目的として行なっている政策や行動なので徹底的にルールを突き通して幕府としてはいいと思ったし、キリスト教っていう大きな一つの宗教を抑えるためには犠牲が出てしまうのも仕方がないと思いました。
- ・ 当時の考え方として、幕府の考え方としては正しいことをしていたと思う。キリスト教のことについては幕府側として考えればキリシタンを物理的に減らすこともできるし、見せしめにもなってキリスト教の考えをなくす良いものだと思う。元々幕府のしたことは正しいという考えだったから考えは変わらなかった。